

硬球再生、革職人の技

新庄 皮革メーカー 小川健さん

真っ白い革に赤い糸の縫い目。実は芯の糸を巻き直し、表面の革を交換した硬球だ。使われて傷んだら、また革を取り換えて生まれ変わる。価格は新品の3分の1程度。こんな再生球が今、各地の野球チームを支えている。しかも二酸化炭素(CO₂)の排出抑制につながる事業だとして今月、表彰を受けた。

誕生のきっかけは、10年の小川健会長(79)が新庄北近く前。新庄市の皮革製品 高校野球部の練習を見学しメーカー・グリーンバレー たことだ。革製品として硬



使い古して傷んだ硬球(左)と再生球を持つ小川会長。試行錯誤を繰り返して再生する技術確立したという。新庄市

「新品よりCO₂削減」表彰

球の生産に興味を持っていて時、ポロポロの硬球にテープを巻いて使っているのを見て、再生できないかと思いついたという。

しかし使い古した硬球は、傷み具合が一つひとつ異なる。内側の「芯」の糸の巻き直し、張り替える革にかかる圧力や糸の縫い目の膨れ具合など、革職人の

小川会長が試行錯誤を続けた。「革の形をどうするか」が難しい。ベストの抜き型にたどり着くまで2、3年かかった。縫い目の出方も均等でなくてはならない。革を引っぱる縫いの強さを部位ごとに変えた」と小川会長は話す。

試作品は新庄北高校に届けられ、「練習用なら全く問題ない」と評価された。

ほかの高校にも評判が伝わり、全国から依頼を受けるように。雨や雪の多い地域の学校には水分に強い合成皮革、それ以外には普通の皮革で再生球をつくる。触

感が若干違うことを除けば、重さ約150gではほぼそろっている。今は約700チームから年4万〜5万個の注文を受けるという。

再生球づくりは、新品の硬球をつくるより1個あたり約250g分のCO₂の排出抑制になる。さらにCO₂排出権を絡める取り組みを進めた。

この事業が評価され、同社は今年、2016年度の東北地域カーボン・オフセットグランプリの優秀賞を受けた。CO₂削減などに取り組むJークレジット東北地域推進協議会(事務局・経済産業省東北経済産業局)が15年度から開催しており、今年度は計10団体が表彰されたという。

小川会長は「ものづくりの企業にとり、商品開発と同様にCO₂の削減も技術的なチャレンジ。技術者を育てるいい機会になった」と話している。